

十年後の私に 厦門大学 張佩瑜

「人生なんて、何とかなるわよ」、私はいつもそう思ってきた。そのまま、あっという間に人生の22年間を送ってきた。周りの人は、みんな夢に向かってがんばっているように見えるが、私だけはいつもぶらぶらしていた。夢がないわけではないけど、どうせ「王子様のような人のお嫁さんになりたい」ぐらいの夢しかなかったから、口に出しても、すぐ馬鹿馬鹿しいと思われる。そのような子供っぽい夢など、叶うわけがないと頭では十分分かっているが、ほかに夢がないから、とりあえず、これも夢一つとして数えた。「夢なんか食べられるものじゃないわ。いい仕事を見つけて、いい人のお嫁さんになって、そして親孝行する。これで十分じゃない。余計なこと考えすぎよ。」でも、私はそんな母の言葉に納得できなかった。夢はきっと心を充実させられる魔法の力を持っているようなものだと思っている。しかし、ないのだ。ただ、漠然とした人生の流れに流されていくしかできないという無力感をしみじみ感じていた。本当は苦しい。自分とは何者で、どこへ向かうのか分からない。目の前に広がっているのは、先には何も見つからない厳しくて果てしない海のような青春だった。

私は最初の夢を忘れてしまった。いや、そもそも、そんなものは最初からなかったのかもしれない。しかし、人生はドラマのようだと言われるが、あの夏を境に、私の人生も、そんな空虚な状態から救われた。

大学二年生の夏休みだった。散らかり放題になっている部屋を片付けることにした。机の上に開きっぱなしになっている雑誌や教科書、部屋の片隅にほうり捨てられている使用済みのノート、そして、埃っぽい何冊かの日記帳。もう一度読もうとして開けると、その中に挟んであった一通の手紙が目に入った。ただ誰かからの手紙だろうと思ったが、よく見ると、十年後の私に宛てた手紙だった。でも、書いた記憶なんてなかった。好奇心にかけられて、読み始めた。

「十年後の魚ちゃん（私の当時のニックネーム）、こんにちは。今、どこで何をしているの？ きっと元気できれいな女の子になったはずだよね。お父さんとお母さんは元気？ ねえ、今の私の夢を話してもいいかな。今はどうしても叶えられないけど、十年後なら、きっと叶えられるよね。

実は、家で犬を飼いたいんだ。毎日、犬と話したいの。悔しいことでも、楽しいことでも、何でも話したい。それから、自転車を習いたいなあ。毎日、自転車にお母さんを乗せて、公園に行ったり、市場に行ったりして、力があれば、もっともっと遠いところまでいったりして。あと、ちょっと恥ずかしいけど、十年後、好きな人に自分で作った料理を食べさせたいんだ。でも、食べてくれる人がいるのかな。それから、ええと、まだまだたくさんあるんだ、でも、多すぎると、十年後の魚ちゃんも疲れちゃうかもね。とりあえず以上の夢をよろしく。十年後の魚ちゃんも今の私のように毎日元気満々でいてくれたらいいな。」

読んでいるうちに、いつの間にか涙がこぼれて、持っていた手紙を濡らしていたことに気づいた。十二年前のある夜、机の前で、自分の小さな手で楽しそうに夢を描いていた女の子が見えてきたような気がした。思い出した。あれは私の十歳の誕生日の夜だった。お

母さんに「何か夢はあるの」と聞かれて、私はずっと黙って考えていた。それから「たくさんあるけど、今はまだ叶えられないなあ」と言った。「じゃあ、十年後にはきっと叶えられるはずだね。十年後の魚ちゃんに任せたらどう」とお母さんは微笑みながら言ってくれた。私はすごくうれしくて、そのときの夢を一つ一つ手紙に記したのだった。

私にも、こんなに多くの夢があるのではないか。十二年前の私のためにがんばらなければならない。私は毎日一個の夢というペースであの時の夢を叶えようとした。そうしているうちに、自分の心も生活も豊かになってきた。夢を持って叶えながら生活していくことがこんなにも幸せなんだと始めて感じた。そして、新しい夢も出てきた。全部小さいけど、私にとっては、人生を進めていくための原動力のような存在で、大切に感じるようになった。

ある日、私はまた手紙を書き始めた。十年後の私に、今の自分では叶えられない夢を託したいからだ。

十年後の魚ちゃんへ

こんにちは。

今、元気？もう結婚したの？まさか専業主婦になっちゃった？まあ、それもいいかな。

ね、私には、夢があるの。できれば叶えてもらいたいんだ。今の私にはまだお金が足りないんだけど、この手紙を読んでいる魚ちゃんに、もしお金があるなら、お母さんとお父さんと一緒に旅行に行ってくれないかな。それから、女流小説家の三毛の本が好きで、日本語に訳したいんだ。まだまだ下手だけど、時間をかけて、こつこつ日本語の勉強を頑張っていれば、十年後には、きっと立派な翻訳ができると思うから、頑張ってくれない？

あと、一番重要なのは、今の私のように毎日元気満々でいてほしいってこと。夢を育てて、今を生きてほしい。青春の海は厳しいけれど、怖がらないで、自分の夢を船にして乗っていけば、きっと明日の岸辺に着けるはずだよ。叶えられなくても、くよくよしないで、また十年後の自分に任せたらどう？

人生って、そもそもそういう夢の積み重ねでしょ。